

農民女性作家・五十嵐フミにみる意識と介護問題

農水省農業総合研究所 相川 良彦

農民女性作家・五十嵐フミによる表現の3形態（話し、文学作品、日誌）の分析を通じて、氏の意識構造を明らかにする。インタビューに際して、氏はお喋りで、率直に発言する。話題は地域社会や文学仲間の人間関係が中心である。貧しさと女性であるが故に差別されたことへの憤懣や社会批判がそのバックボーンにある。祖父母・父や夫との葛藤もまた繰り返される題材である。実生活者としてのグチや愛憎、そして生活のエネルギーがそこにほとぼしる。

氏の小説題材は、初期において自己の二面的性格の矛盾（例えば、嫉妬心）を追求した心理小説が目をひく。中期以降は家族・親戚の人間関係の愛憎を時代状況のなかに位置づける社会関係（風俗的）小説が増える。それらは確執はあっても他者（書かれた対象者も含め）の理解の得やすい領域であり、戦後民主化のなかで出会った左翼思想（真壁仁ら）が、地域と家族のなかで押しつぶされそうな氏に、この題材と葛藤することの意味（抵抗の論拠）を与えたのだった。そして、後期の作品のなかに、地域社会との確執を真正面から取り上げる作品も出現する。

2つは、一般の農民文学では成功例の少ない男女の性愛関係にチャレンジしている。ただ、そこでは実話ではないと意識的に判るような不自然な設定も多い。性愛問題は、農民文学ではフィクションの形でかろうじて公表しうるタブーの題材の1つなのである。

話しは出来ても文学に取り上げることを憚る題材の1つは、文学仲間との確執である。2つは、子供とその配偶者についてである。とくに子の配偶者については、話しさえ少なくなる。3つは、金銭問題である。それら3つは氏の意識や生活において重要な位置を占めているが、書くことで生じる軋轢への懸念或いは取り上げるに足りないとみる価値観が作品化を抑制したのである。

3年にわたる夫の介護も、小説や話しにさほど登場しない題材である。氏がその間につけた日誌によれば、家族・地域社会との日常的な付き合いが頻繁にあるものの、介護自体は氏1人の孤独な作業であったことが判る。別居家族や地域の社会関係は、介護を特定家族員（女性）に背負わせがちで、そのままでは介護の当てにならない存在である、と言えるだろう。